



プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月06日 11:35:37

2011年01月06日 11:35:37

入館証番号:

[Empty box for library card number]

入館証番号:

[Empty box for library card number]

Call Slip

32

<請求票>

2922
1

Call Slip

<請求票>(控)

資料名 : 北支と南支の貌

巻次 :

著者名 : 川島理一郎 // 著

出版者 : 竜星閣 頁数 : 242p 図

大きさ : 20cm 出版年 : 1940

書名
資料名 : 北支と南支の貌
巻次 :
著者名 : 川島理一郎 // 著
出版者 : 竜星閣
出版年 : 1940
大きさ : 20cm
頁数 : 242p 図版18枚

所蔵館 : 中央
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンタ

所蔵館 : 中央
所蔵部署 : 1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所 : 1/75A 中)MB2書庫A
資料ID : 1126912654

配置場所 : 1/75A 中)MB2書庫A
資料ID : 1126912654

請求記号
2922
1

新東自人社	力	事
↓		
新東自人社	請求	報告
MB1 マイカ	B1 アルファベット	原紙 縮刷
MB2 マイカ	B2 洋	中 朝
行 1F	B1 B2	
多 児 青	1F B1 B2	

目次(全4頁)

本 730~787

73~287

136~249

目次

北支行	翌
大陸の旅	至
長城線	吾
蘆溝橋の月	天
通州の一日	空
北京見たり聞いたり	世
北京の空	穴
北海公園	空
萬壽山の慶祝風景	光
天壇	〇
景山	〇

寺内將軍を訪ねて	一〇四
大陸秋色	一〇六
北京の正月	一一三
冬の大同行	一二四
大同石佛	一二五
大陸の花	一三六

*

廣東從軍行	一三六
南支畫信	一三八
南支那海	一三八
廣東大觀	一四〇
珠江風景	一四四
廣州縣爆撃の跡	一四四
避難民風景	一四六

蛋民船の日支親善	一四八
廣東の宿舍	一四九
廣東雜記	一五〇
廣東四景	一五二
月夜の廣東	一五二
中山記念堂	一五三
泥樺市	一五四
珠江風景	一五五
珠江の秋景	一五六
廣東のいもの食ひ	一五七
雲海の旭日	一五八
女性宣撫班	一五九
廢墟素描	一六六
新思想の入口・廣東	一七七

廣東から歸つて……………一〇

*

戦時下の支那風俗……………一六

支那の龍その他……………二五

從軍畫と戦争畫……………二九

支那を畫く場合……………三〇

洋畫壇の傾向……………三〇

若い作家達へ……………三一

朝陽映島……………三五

紀元二千六百年を迎へて……………三九

二十五年前の巴里……………三三

風景畫家の見た日本と北米……………三三

*

あとがき……………三九

挿繪目次

大同石佛(別刷寫眞)……………卷頭

北京九龍壁……………三

萬壽山石筋……………五

聽鴻樓の庭……………七

萬壽山知春亭……………九

廣東、珠江河畔……………二

珠江、海珠橋……………三

珠江下流、江浦附近……………五

廣東、〇〇爆撃……………七

廣東、避難民……………九

同……………三

弘法大師が暫くここに逗留して「いろは」四十八文字の考案をされたといふことが傳はつてゐる。

72

恐らく大師は青島あたりに上陸して大運河を溯り白河に出て通州へ來られたのではなからうか。その大師の遺跡は伏魔大帝宮といふ寺で、これは保安隊本部の一町裡先きにある。

— 昭和二三・一〇、實業之日本 —

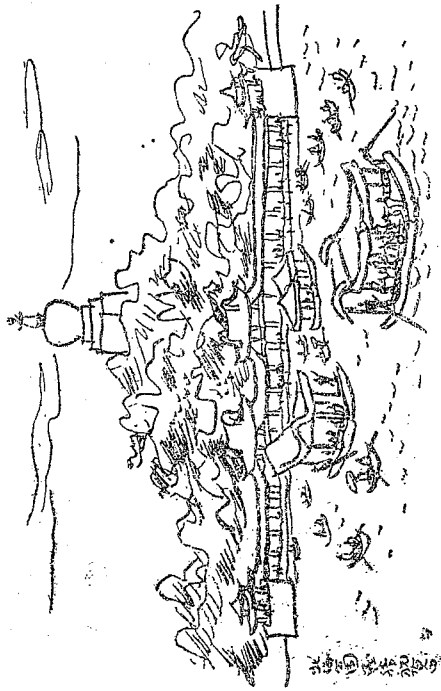
北京見たり聞いたり

北京に來てから既に二週間たつ。描く前に見ること、そしてそれを凡ゆる角度から試みて本當に自分に納得出来るまでは制作にかゝらないといふ習慣の私は、スケッチ・ブックをポケットに、毎日北京の内外を歩き廻つてゐる。

描くべき對象としての北支は、私にとって二重の意義を持つてゐる。それは北支を描くことが自己の畫業の更なる追求であると同時に、彩管を以て御奉公を爲し得るといふことが自分にとってまことに願つてもなき機會であることを痛感するからである。私は緊張した氣持で、勇躍内地を出發して來たのである。

ところが北京に來て見ると、ここではもう疾くに普段のまゝの生活が營まれてゐるのに

73



北平國勝觀日

驚かされた。美術上の遺蹟のやうなもの
 のは勿論であるが、市内の凡てに亘つ
 て今度の事變による何等の損傷も示さ
 れて居らない。これは皇軍が世界文化
 史上に誇るべき大功績である。

北京へ着いて間もなく徐州は陥落し
 街は一時に戦勝氣分に彩られ、到る所
 に大アーチが出来、各城門には蔣政權
 没落と称慶祝徐州陥落と称慶ひは日華
 提携などといふ大文字をイルミネーシ
 ョンにして大變な賑ひであつた。二十
 三日にはまた紫禁城前の廣場に大祝賀
 會が行はれて、數萬の人出があつた。
 花電車も通れば旗行列もあり、日支親

善風景が到る所で展開されてゐた。

私は斯うした中を歩き廻つて毎日畫材をあさつてゐるのであるが、内地で想像してゐた
 やうな何等の危険も不安もなく、頗る落着いた氣分で仕事が出来るとを全く意外であつた
 と考へる反面、これも皇軍の威力の然らしむるところであると、今更ながら皇軍への感謝
 を感ずるばかりである。軍部から與へられたこの一流のホテルの一室に納つて仕事をす
 ることなども、前線にゐる將兵の勞苦に引きくらべて全く濟まない氣持がしてならない。
 吾々も何等かの役割の下に能ふ限りの力を盡して、一日も早く皇戰の目的を達成せしめね
 ばならぬことを痛感するばかりである。

舊都北京は長い歴史の影をひそめて、見るべきものが實に多い。北京見物の二週間は毎
 日新しい感激の連続で、考へを纏める暇もない程である。町は樹木が多く、坦々とした大
 道は如何にも大陸の都らしく餘裕があつて、自からのんびりした落着きを覺えるのも嬉し
 かつた。

北京見物の第一に紫禁城を見物するのはお上りさんの誰でもプログラムのであるが、私
 もお他聞に漏れず早速拜觀に出掛けた。そしてその素晴らしさが全く聞きしに優るものであ

るのに、北京見物の幸先よいスタートを切ることが出来た。紫禁城は内部へ入ると益々その規模の雄大なのに驚かされる。何處を見てもその工事の雄大なのに驚嘆を禁じ得ない。この壁、この石、この瓦と云つた風に、何處を見てもその素晴らしい量に圧倒されて了ふばかりである。東西南北の宏大な樓門から内殿の大和、中和、保和の三大殿は何れも宏壯偉大な建築美である。その他武英殿、文華殿には各種の歴史的寶物の陳列があり、殿、堂、亭、廡、小門の類は實に無數といつてもいゝ程で、一寸やそつとでは見きれない。

それからまた宮中の庭が、中央公園、中南海公園、北海公園と云つて今は公開されてゐるが、これはまた廣大な地域を占め、その中に不忍池程の池が三つもある位である。池畔には柳の巨木が並木をなし、支那式の庭園美を十分に味ふことが出来る。

町の中には寺院や廟が散在してゐるが、南の端にある天壇は素晴らしい大きな圓形の堂宇で、碧色の琉璃瓦を屋根に置き、今は修復も成つて文字通り燦然たるものである。また南東の端に孔子廟があるが、これはまた古色蒼然たるもので、境内の古柏は森々として晝尚暗く、如何にも聖廟の趣きを傳へてゐる。

市内の見物の中で最も印象の深かつたのは北海公丘の岡に登つて、この善因殿といふ

ラマ風の堂の階廊から眼下の景観を撞にした時である。北海を眼下に、遠く中南海の湖水を見る眺めは全く一幅の支那畫で、これこそ日本でもなく西洋でもない、支那の山水美そのものであることを感じた。この堂の背後にラマ式の白塔があるが、これは清朝の順治帝の建立にかゝり、熱河にあるものと同一様式である。

それからもう一つ一度は登つて見ねばならないのは景山である。これは皇城の最北端にあつて、全城を眼下に俯瞰する事が出来る。紫禁城の建築群を一望に集め、その均齊美の壯麗さを撞にし得るところ全く一大偉觀と云はなければならない。實に北京ならではの見られぬ壯大を極めた眺めである。

市内を一巡した者は誰でも一應郊外の萬壽山を訪れる。この廣闊な四圍の眺めはまた何とも云へぬ美しさである。萬壽山そのものの建築美も立派であるが、それは周圍の風景と調和して更にその魅力を昂めてゐる。山の中腹に聳立する佛香閣から西へ下りて例の有名な石舫を見るのが順序であるが、この石舫の上部はペンキで塗つて右に見せかけてあつたりして、期待が大きかつた爲か何とも失望の念を禁じ得なかつた。それはとにかく、南端の小さい島にある知春亭から湖水を隔て、眺めた萬壽山の全景は全く素晴らしいもので

ある。西方太行山脈の嶺々は大きなカーブを描き、その麓の玉泉山の高塔の一點が將にこの畫幅の點睛として全畫面を引締めてゐるところ、その構圖は雄大であると同時に緊密を極めた組立てである。壯大な自然美に配する巧緻な人工美の、これは最も美しく調和した姿である。

78

*
さてこんな調子で書いて行くと全く案内記同様に切りがないから、この邊で部分的なものに対する感想を書くこととする。先づ紫禁城を見直すことにしよう。

紫禁城の全容は一言に評すれば莊重宏壯である。城壁、樓門、閣樓は何れも雄大なる構築であり、そこには一種壓迫するやうな気分が漂つてゐる。勿論細かに觀察すれば、その裝飾の部分の如き色彩も凡俗で、同じ文様を繰返して使つてゐるところなど、些か單調に過ぎる感を免れない。大體が清朝に修理したものでその點己むを得ないのであるが、宮殿建築としてルイ時代のものなどを見た眼には、それは如何にも粗雑な感がしたのである。大理石の橋欄の獅子頭や雲龍なども唐代のものに比べると遙かに手法が劣つてゐるが、これも時代の衰微で致し方のないことであらう。天井の龍紋なども無變化のものが多いが、

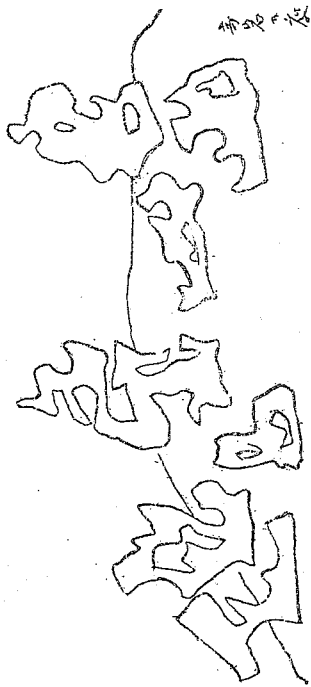
その中で大和殿の天井の中心裝飾は美事である。

寶物では武英殿のものが、最も見應へがある。以前には唐宋以來のもつと優秀な陶、瓷、金、玉工の遺品があつたのであるが、其大部分は既に南方へ運ばれて、今はたゞ明清のものを標本的に陳列してあるだけで、かなり淋しい感じがする。殊に永樂、宣德、萬曆などの佳品が一點もないのは驚くの外はない。漸く康熙時代の翡翠釉、黃釉、白釉などを見て眼を休めるといふ程度で、その餘の大部分は乾隆以後のゴテくした俗っぽいものばかりである。一方文華殿には極めて傑出した古書畫類があつたが、これも今はすつかり南に持ち去られて了つてゐる。たゞ米人フアーガソン氏のコレクションの書畫古銅器が陳列され、そのうち銅器には優秀なものがあり、畫も宋代のもので一二よいものがあつた。

三大殿の裏の内廷は皇帝、皇后の御住居で宣統帝も御出宮まではここに居られたのであるが、この殿堂樓閣にも無數の寶物があつたのに、これまた目ばしいものは悉く南へ運び去られて今は殆んど見るものがない。

次に庭園の中で最も嬉しかつたのは牡丹と芍薬の畑であつた。牡丹は既に遅く花を見る事が出来なかつたが、實に廣大な面積でそこに作られた牡丹の株の多いのには一驚した。

79



中には數百年の老木もあると聞いた。芍薬は恰度眞盛りで今を盛りと咲き誇るその美事な眺めは恰で牡丹かと疑はれた程である。芍薬もこれ程に作られるものかと感心させられた。

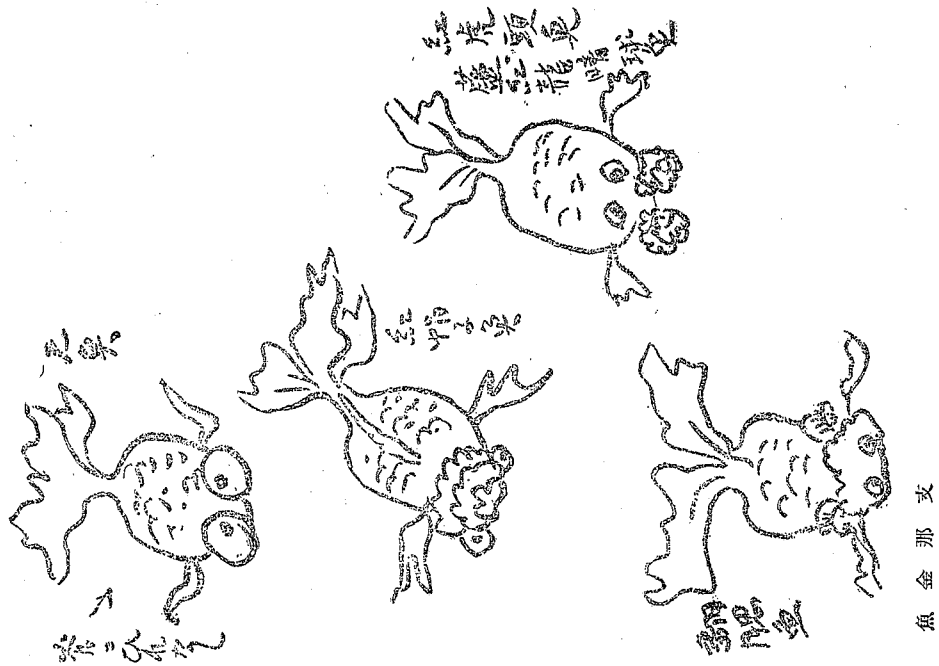
80

更に驚かされたのは古柏の巨木の並木であつた。全部で十本以上もあらうと思はれる巨木の全部が最初からこゝに植ゑられたものであるから驚く。巨大なものは明朝以來のもので、實に古色蒼然たるたすまひである。枝の伸び工合が如何にも支那好みと云ひ度いやうなクネくと曲つた姿であるのも面白かつた。この巨木の林の中を行く時、ふと私はヴェルサイユ宮殿の森を思ひ浮べた。ルイ時代に植ゑ並べられたこゝの森は同じく森々と生ひ茂つて、その間を大きなアヴェニューが通つてゐるが、その木蔭道を馬車で走つた時の

何とも云へない氣持が、千年の歴史をこめたこの並木の中で卒然と回想されるのであつた。

庭園内の各所には不思議な穴のあいた巨岩を立派な大理石の臺に載せて並べてあるかと思ふと澤山の岩を所構はずばら撒いたり積み重ねたりしてある。これらの岩の配置の趣味は日本人には全く不可解である。日本の庭園は自然の再現を目的としてゐるが、支那人は岩を骨董品と見て庭へ置いてゐるのではないかと思ふ。これらの岩は何れも深山の龍壺かさもなくば荒磯の峭端にあつて幾千年か水流に洗はれた形である。中でも驚くのは西太后の御寢所の前庭にある八疊敷程の奇岩は大湖の水底から運んで來たと傳へられてゐるが當時運搬の便もないのにどうして持つて來たかと思へるやうである。とにかくこれら無數の奇岩巨石を運搬して來た費用と人力は凡そ大變なものであつたらうことが直ぐさま想像出來るのである。そして斯うしたものをこゝまで運んだ人力を喜ぶといふところに支那趣味の特質が窺はれるやうな氣がするのである。つまり岩そのものゝ形の妙を喜ぶと云つても、それが日本人の考へるやうにその岩を以て自然の姿を素直に味はうとする氣持ではなく、その岩の不思議な形そのものに興味を持つのである。それは結局グロ趣味とも云ふべ

81



き趣味であらうと思ふ。

斯う考へて來ると支那には實に色々とグロ趣味がある。食物などにしても随分と奇妙なものを食べるが、いまこの園内で發見したのはグロ金魚である。園内には籠や桶に入れて不思議な金魚が澤山飼はれてゐる。

この中には世にも變つた珍魚があるのに私は驚いた。支那金魚と云へば先づ横に目の飛び出したものを考へる位であらうが、こゝには四時全く青天井を眺めてゐる望天魚といふ呑氣な金魚がゐるから愉快である。また恰度西洋人の帽子でも被つてゐるやうに見える紅帽子魚といふのもある。それからまたこれは御苦勞にも頭の上に、紅、桃、或は藍色の扇をつけ如何にも煩ささうにして泳いでゐる金魚もある。この種を紅虎頭魚または紅龍睛球魚と名付けてゐるが、その名の通り如何にも癡つた珍魚である。

これらの金魚を見てゐると、支那人のグロ趣味がつくつくと窺はれるやうに思はれる。餘程徹底した趣味からでなければ、斯うまで工夫し、またそれを實現出來るものではない。何といふ造物主のいたづらであらうと考へられてくるが、それよりも支那人こそは實に不敵な惡戯者であるといふ氣がする。

然し支那人のグロ趣味を彼等の偏奇性としてのみ見ることも當らないと思ふ。それは大陸の荒涼茫漠たる單調さをまぎらす爲の一種の手段として考へらるべきものかも知れぬ。大陸生活の寂寥を逃れる爲に強烈な刺戟を求めて毒々しい色彩や怪奇な形を好むやうになつたと考へることも不自然ではない。支那人のグロ趣味もその風土に立つて初めて理解し得るものである。

園内にはまた格言亭といふ珍しいレナサンス式の圓形の堂がある。丸柱が八本あつて外形は全く西洋風であるが、堂の内部は柱を削り、それに八聖の格言を美しい筆勢で書いてある。清朝の皇帝は自ら毎朝この堂内に立つて沈思黙考せられたものだといふが、その眞偽は詳かでない。一寸變つた堂であるから、序にその八句を紹介して置かう。

武穆之言曰文官不愛錢武將不惜死

孟子之言曰國之本在家家之本在身

孔子之言曰自古皆有死民無信不立

陽明之言曰知是行之始行是知之成

丹書之言曰敬勝怠者吉怠勝敬者滅

子思之言曰溫故而知新敦厚以崇禮

朱子之言曰盡己之謂忠推己之謂恕

程子之言曰主一謂之敬無適謂之一

宮殿建築を拜觀した中で私が最も感心したのは聽鴻樓と萬字廊であつた。この建築は南海公園の西北隅にあり、嘗て西太后の住居であつたものである。聽鴻樓は皇后の寢所、讀書室、食室などを中心に幾棟もの堂が折重つてゐる中に一際高く聳えてゐるが、この邊は樹木が鬱蒼と茂つて珍しく松が多く、その中を名も知らぬ小鳥がホウくくと絶え間なく囀つてゐて正に仙境の思ひがある。聽鴻樓とは全くよくも名付けたものだと感じた。

この建築に連なる數多の廻廊があるが、それが一段と開けたところに二十間餘の正方形の池を大理石の欄干で圍ひその中央に卍字形に廊下をつけのたが萬字廊である。これは見るからに女性美で、梁欄、天井など極彩色の花鳥山水も凡て巧緻に出來て居り、如何にも皇后好みの感じのする結構なものである。西太后當時の瀟灑たる佛を徳ぶに充分である。

*

以上を以て見物記の筆を止めるが、斯うして見て來た私の眼には、日本人と支那人との

物の考へ方には事實かなりの開きがあることが感じられた。

86

然しこの開きは相互の文化の相違であるから、これから互ひに相交り、相携へつゝ相互の文化の特質を検討し互ひの足らざるところを補つてゆけば、日支提携はやがて心の底からの結び付きとなり得るものであると信じてゐる。斯くして日支文化を根柢的に交驩することによつて、この開きは速からずして解消するであらうと考へる。

私の知人で日本に留學した親日支那人があるが、その人は常に「支那の人は未だく日本を知らぬ。日本は昔支那の教を受けたなどと昔のことを未だに言つてゐる人さへ少ない。最近多くの人が支那へ入り込んだが、滿洲から來る人が多い。それは言葉の便からであらうが、その中には良くない日本人がゐて支那人を騙したりする。それで支那人はそんな連中のすることを日本人全體のすることだと考へてゐる。そんなことでどれ程日本人全體への感情を悪くしてゐるか判らない」と語つてゐた。

これは唯一人の支那人の話であるが、この中には非常に眞實が語られてゐるやうに思はれるのだ。

日本は常によき支那の指導者であるといふ信頼を彼等に持たせる爲には、凡ての日本人

はもつと／＼徹底的に良き手本を彼等の前に示さねばならぬ。

凡ゆる場合に、眞に彼等を信頼せしむるだけの形を示して、心の中から彼等を納得させねばならない。斯くしてこそ初めて、東洋永遠の平和が、日支兩國を礎として確立し得るのである。

私は勿論政治家ではない。たゞ一生懸命に繪を描いてゐるだけである。それはこゝへ來てからも毎日寸暇なくやつてゐる。然し方々を歩いた間にさうしたことに氣付かされたのも事實である。

來週は大岡へ出掛ける。大岡には素晴らしいものが澤山ある。戦跡も見られると思ふ。今はたゞ見たり聞いたりしたことをありのままに書いてだけである。

—昭和二三・八、文藝春秋—

87

皇軍の手厚い庇護に信頼してゐる市中は既に日常の生活を取り戻してゐるからいゝのであるが、市中を逃れて戦線近くへ逃避した連中に市中の状況を一刻も早く覺らしめやうとする宣撫の仕事は、仲々並大抵の苦心ではない。方々に散らばつてゐる彼等避難民に最も手つ取り早く知らせる方法として、飛行機から傳單を撒く方法が執られてゐるが對手の種類によつて一々どうを作り分けねばならぬし、第一多數のどうを用意するといふ仕事が大變である。更に香港や厦門へ行つてゐる避難民を呼び戻す爲の工作に至つては、支那側の逆宣傳と直接火花を散らす宣撫戦であるから實に大仕事である。現在漢字の廣東旬報、英字の香港日報がその任に當つてゐるが、香港には數種の英佛新聞のほか漢字新聞が二十餘も出てゐるといふことだし、當事者の苦心の程は察するに餘るものがある。

宣撫班と治安維持會の努力によつて日夜復興の表情を見せつゝある中にも、一と際それが目立つて判るのは、抗日どうが親日どうに塗り代へられ貼り代へられてゐる姿である。抗日陣營の本據だつただけに、市中の各所には大仕掛けの抗日壁畫などもあり、その他看板やポスターなどは無數に遺つてゐるが、私の歸る頃にはそれらはすつかり影をひそめて反對に「建設新中國」「復興大東亞」「倒蔣救國」といつた新しい文字が行人の眼を強く捉

えてゐるのだつた。海珠橋の袂のカートの横に大きな抗日壁畫があつたのを思ひ出したので、歸る日の前日スケッチに出掛けたところが、綺麗に塗りつぶされてゐてすつかり無駄足をさせられて了つた。勿論大いに嬉しい無駄足ではあつたが。

廣東は支那革命の發祥地であつたばかりでなく、常に凡ゆる新思想の出發地であつた。そこには新しもの好きの浮つた心理も窺へないことはないが、北支の支那人と違つて強い進取の氣持が見られることも事實である。従つて彼等が漸次東亞の新事態に自覺め行くと共に、彼等の新しいイデオロギーへの認識と把握は案外急速に行はれるのではないかといふ豫想が同時に成立するのである。少くとも彼等には新しい思想を吸收し得る能力があるのだから新支那建設の思想がこゝを大きな一つの據點となし得ない理由はないのである。問題は結局彼等を善導する方法と力とに歸るのであるが、滯在中の私の見聞は、既にこのことが空想でないことを説明しつゝあつた。私は東亞新秩序への新しい中心地として甦生した廣東を、改めて今一度訪れねばならないと考へながら、飛行機の窓から別離の一瞥を廣東の市街の上へ投じたのであつた。

南支那畫信

南支那海

廣東への從軍行を、福州から那覇、臺北と飛行機の三段跳で行つた私は、飛行機ほど愉快な乗物はないことをつくづくと覺つた。

地球を離れて眺める風景は、地上で見る景色とは角度も大きさも



南支那海を望む

すつかり違つてゐる。それを味はふだけでも貴重な體驗であるが、更に空中から眺めた自然の美しさは、そこに畫家の眼と心をこの上なく充足させてくれるものがある。機上の感覺は私にとって實に素晴らしい收穫であつた。

快晴の飛行日和に恵まれて臺北の飛行場を離れると、箱庭のやうに見える市街から、今度は小高い山々が折重つて眼に入る。その山々は凡て頂上まで耕されて、見る眼遙かに青々と作物が實つてゐる。冬枯れの内地から飛び出して來た眼には、その新鮮な緑は何とも云へない活々とした感じである。

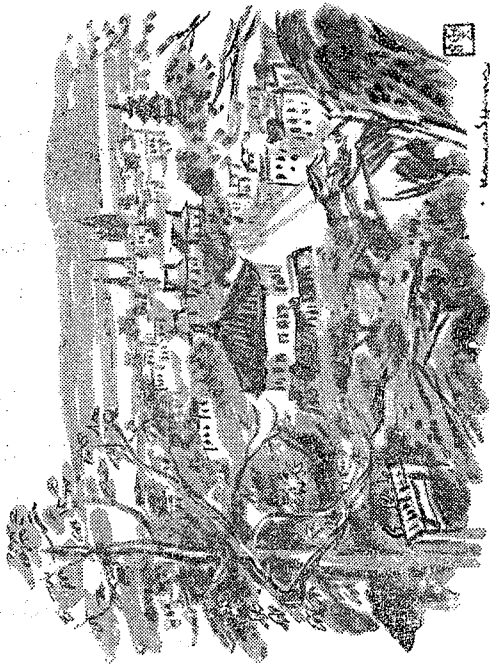
臺灣海峡を過ぎると、洋々たる南支那海が眼下に無限に擴がつてゐる。上空から物を見ると、空氣の透明なために凡てがハッキリと見え、遠い感じが少しもしないが、群青の海には浪の高低も視界から没して、捨て晴れた日の潮水のやうに、靜かで明るいのである。その中を時々大きな雲の影が過ぎ、その影の間を汽船やサンパンが縫つて行く。實に大きく明るい風景である。

機空〇時間、やがて行手に陸地が霞んで見えて來る。視界に海岸線が明瞭になつて來るかと思ふ間に、無血敵前上陸に皇軍の威武を世界に輝かしたバイヤス灣が指呼の間に迫つ

てゐる。乗客の凡ては無言の裡に、この偉大な戦果の跡を空中から喰ひ入る眼で見詰めるのだ。

廣 東 大 觀

今度の從軍の重要な目的の一つである陸軍省保存の記念畫の題材は、南支派遣軍司令官安藤中將と相談して、廣東市の大觀を描くことになった。市の北隅に觀音山といふ小高い山があるが、この上に孫文を記念する中山記念塔といふのが建つてゐる。私はその塔の中段から全市を一望に俯瞰した圖を



廣東市街展望

つくることに定め、スケッチを描きに毎日こゝへ通つた。こゝに描いたのはそのスケッチであるが、先づ眼下に見える大きな八角形のコバルト色の屋根は中山記念堂である。皇軍の占領後間もなく廣東治安維持會の發會式が行はれたのはこゝである。これをへだて、見える黄色い大きな屋根は廣東市政府で、その前が中山公園である。更にその右には、淨慧公園の九重塔が建つてゐるのが見える。

觀音山のたもとには双山寺や三元宮などの廟や寺院の巖が光つて見えるが、その一群の先は近代都市廣東の姿である。一と口にいへばアメリカ風の近代都市の相貌であるが、四角いビルディングの間に色瓦を載せた支那建築も交つて色彩はかなり豊富である。しかし大體の印象は如何にも歐米保存派の本據らしい西洋かぶれの姿であり、その點支那の氣分はむしろ稀薄なやうな氣がする。近代建築の楯比する先には珠江の流れが銀色に光つて見える。この附近一帯がバンドで、廣東第一の繁華街である。その中に一と際高く聳えて見えるのが愛羣ホテルの十六階のビルディングである。

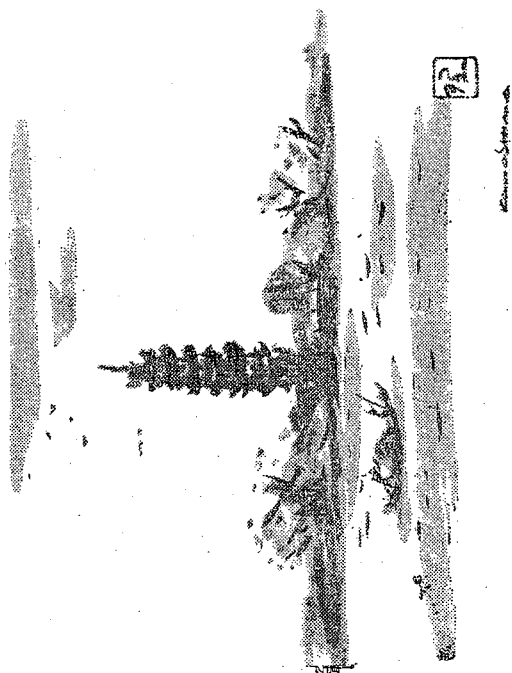
このホテルからちよつと川上に沙面租界がある。この一劃はいふまでもなく歐米各國の東洋出張所の一つであり、戦火からの安全地帯である。皇軍の威武を眼前にまざまざと見

せられた彼等は、いま行届いた治安
工作下に暢気にラニスなどに興じて
ゐるが、私の會つた連中は流石に皇
軍への感謝を口々に語つてゐた。

珠江風景

歐米色濃厚な廣州市街で、支那色
を味はひ得ないことに些か失望した
私は、珠江を下つて初めて待望の南
洋情景に接することが出来た。廣東
に來て珠江を見なければやはり眞の
廣東は語り得ないと思つた。

珠江の流れは、黃河とも揚子江と



珠江風景

も選つてそこに自ら別種の趣を見せてゐる。南國の水らしくトロリとしたところがあつて
如何にも洋々たる感じである。流れは相當に早いといふことを聞いたが、見たところはむ
しろ湖水のやうに靜かである。石で積み上げた堤防や、赤土の水際にヒタヒタ押し寄せて
ゐる感じは、文字通り岸を洗つてゐるといふ氣持であつた。

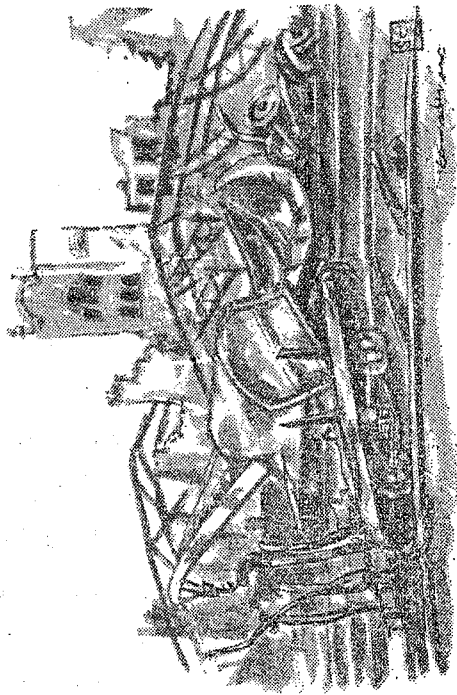
河の兩側の無限に平坦な土地の展がりを見ると、沁々支那は大きいといふことを感じる。
その縹渺とした氣分は、天地の悠久と無限の平和に通ずるやうな氣がする。一面に炎陽が
燃え、屋氣樓がボツカリ見えるやうな、明るい寂しい廣さが、見る眼遮に連つてゐるので
ある。その間に點在する木々は多く榕樹や荔枝やバナナの亞熱帯の植物であるが、時々梅
の花が咲いてゐたり、或は赤や黄に紅葉した温帯の木も見かける。内地では全く想像の出
來ない春と秋を一緒にした眺めである。

無限に平らな土地の連りの中には稀に人家を見かけるだけで支那人は一體何處に住んで
ゐるのか不思議な氣分にさせられる。その中にたゞ一つボツと古風な九重塔がとり遺さ
れたやうに建つてゐるのなども如何にも大陸といふ感じである。

廣州驛爆撃の跡

近代戦の震烈をまさくと實感させる空爆の跡は、昨夏北支へ赴いた際、初めてその物蔭さを知ったが、廣東では更にそれに幾十倍する凄まじさを見た。わが荒鷲の双翼下に、完全に制空權を奪はれたこの控蔭ルートの據點が、徹底的なわが空軍の反覆爆撃の威力を、さぞや思ふ存分味はつたであらうことを、それらの廢墟は最も如實に物語つてゐる。

わが皇軍の爆撃が目指すところたゞ一つ、敵の軍事施設以外にないことは、他の



廣州驛爆撃の跡

如何なる説明よりも、その廢墟の場所が歴然と證明してゐる。傷つけまいと思ふ建物だけを遺して、周圍の軍事施設だけを綺麗にぶち壊してゐる手際の良さは、全く何ともいひやうのない見事さで、中山記念堂が何等の損傷もなく遺つてゐるのは、最も無言の雄辯でそれを物語つてゐる。

有名な廣州驛の爆撃の跡は、戦車、トラック、銃砲等の無数の軍需品を満載した貨車數十輛を一度に木っ葉微塵にした猛爆の名残りを遺憾なく現して、戦場の實感を削々と味はぶことが出来た。わが空軍の威力を示してゐる場所はこゝが一番強い印象で残つてゐる。

皇軍占領以前の無謀な焦土戦術の跡と、占領後の敗殘兵の放火掠奪の跡は、全市にわたつてその無殘な姿を曝してゐる。廣東の銀座通である漢民路なども、すっかり廢墟にされて了つて、彼等の無知、無分別に采れるばかりである。

占領即建設の聖戦は、しかしこれらの廢墟をどしどし跡片づけしてゐる。私が歸る時は廣州驛もすっかり片づいて、機關車が力強い姿でフォームの樞に立つてゐるのを見て、私はどれほど頼もしさを感じたかわからなかつた。

避難民風景

抗日のデマ宣傳から目覺めた支那民衆が、日一日と廣東市中に溢れて来るのを見て、私は新生支那の胎動を微かながらも自分の耳に聽けたことを、今度の從軍中の非常に愉快な感銘としてゐる。占領直後は殆ど數へるほどしかゐなかつた住民が、私の歸るころはすでに五十萬にも上つてゐると



廣東避難民風景

いふ素晴らしい復興振りであつた。

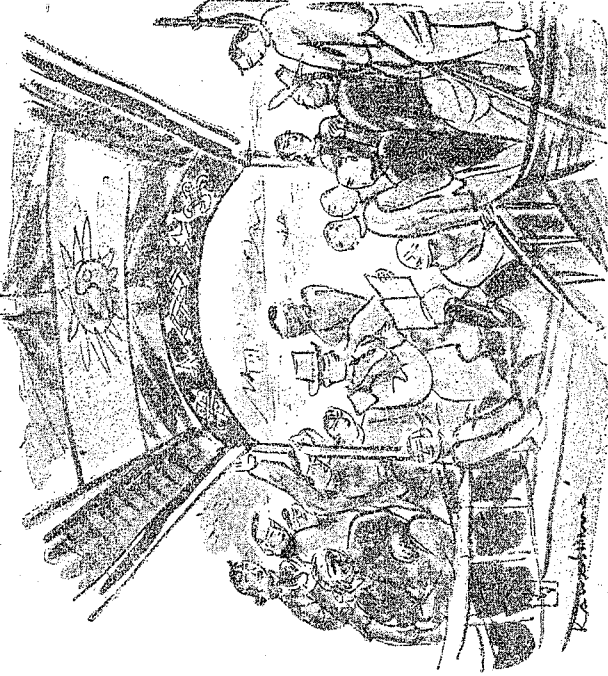
避難民の復歸が、今のところ窮民を主としてゐることはやむを得ないが、これらの窮民に對する皇軍の手厚い庇護は、町の隨所に微笑ましい日支親善の風景を描き出してゐる。軍隊と治安維持會で米の廉賣をやつてゐるが、給與を受けようとする避難民は暗いうちから長蛇の列を作つて待つてゐる。その種々様々な恰好の中に、凡ゆる支那人のタイプが見られて、私はそんなところに却つて本當の「支那」を感じられるやうに思つた。北支の支那人と違つて、日本人そつくりの顔が多いのも南支の特徴を語つてゐたし、盲婆が多いことも妓女を言にするといふこの土地の奇習の名残りであらうと考へられた。

町の目抜きの大通りには支那名物の泥棒市がいち早く復興してゐるのには驚いた。皇軍は市民の財産を傷つけぬやう占領當時から郊外へ駐屯してゐるが、避難民の方はそれをいことにして却つて盛んに掠奪をやつたのである。その掠奪品が泥棒市の商品になつてゐるといふのが實情であるが、それだけに書畫骨董や家具類の高級品からその他何でも揃つてゐる。はじめの頃は租界から西洋人が盛んに買ひ出しに行つたさうだが、今は皇軍の峻厳な取締りで、露骨な盗品だけはどこかへ藏ひこんでしまつたといふことだ。

蛋民船の日支親善

本年初頭の廣東從軍でも占領即建設の力強い歩みを幾多の機会に見聞して来たが、滞在中廣東名物の蛋民の船を寫生に行つて、すっかりこの船上生活者達と仲良くなつたのは愉快な思い出であつた。始めスケッチを擧げてみると、たゞ珍しまうに眺めてゐたが、しまひには私の訪問を待つてくれる程になつた。

國境を超越した藝術の世界が、結局彼等と私とをこんなに結付けてくれたのかと思ふと、私はひそかに從軍畫家としての一つの勤めを果し得たことに満足したが、戦闘以外の機會では皇軍の將兵は、定めしこれに似た愉快な經驗を味はれたことが多かつたに相違ないと思はれた。 — 中興雜報 —



廣東の宿舍

南支那海を一気に飛翔して、飛行機の車輪が廣東飛行場の滑走路の上にピッタリと止つたのは、正午に近い時間だつた。飛行場は市の郊外かなり離れたところにあるが、飛行機を降りると部隊本部からの迎ひの自動車が待つてゐるといふので、戦地での遠慮は無用とばかり、早速それに乗込んだ。

戦地に着いた以上は、何から何まで軍の御厄介にならざるを得ない。——北支從軍の經驗で、甚だ蟲のいゝ話ではあるが、萬事は本部の方へお委せて置けばいゝといふ考へだつた。本部で打合せをすませて、私は向ふ一ヶ月廣東の朝夕を迎へる自分の部屋に連れて行かれた。

砲火の洗禮から全く免れてゐる北京とは違つて、焦土戰術と、敗殘兵の放火掠奪とでかなり痛めつけられてゐる廣東では、勿論北京飯店の恵まれ過ぎた待遇に恐縮するやうな經驗を重ねることは豫想もしなかつたが、それでも想像以上に立派な部屋を與へられて、大いに恐縮した。市の東寄りの一劃、一寸した住宅地の空家を大小五六軒仕切つて、本部に使つてゐるが、私はその中の一番立派な家の三階の部屋に案内されたのである。

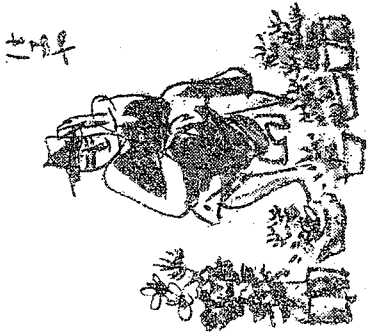
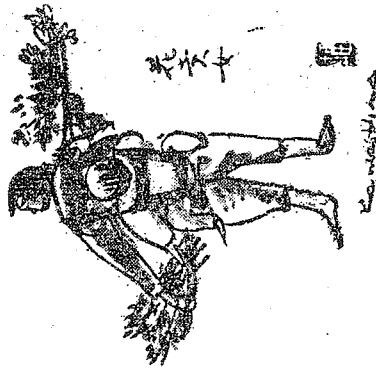
この建物は將校や軍屬の人々の宿舎に當てられてゐるのであるが、大抵は一部屋に二人三人と泊つてゐるのに、繪を描くには一人でないと具合が悪からうと、特に静かな三階に部屋を割當てたといふ話であつた。相當の人の家だつたらしく、掠奪を免れた家具調度を見ても仲々しつかりしたものを使つて居り、私の部屋にも薄い絹の蚊帳を張つた寢臺と紫檀の椅子とが備へてあつた。仕事の都合でテーブルが欲しいと申出でたところ、立派な支那机を兵隊さんがわざわざ三階まで運んでくれたのには、大恐縮だつた。

寢臺と椅子だけは立派だつたが、その他には何の設備もなく、そのガランとした感じは如何にも戦地の宿舎といふ氣分であつた。壁などは酷い埃で、一番困つたのは洋服をかける場所がないことだつた。仕方がないので、風呂敷を擴げて壁にピンで止め、その上に洋

服をアラ下げて置いた。

*

部屋の窓から見下すと、向ふ側の家には兵隊さんが一杯寝泊りしてゐて仲々賑やかである。傍の空地には土俵のあとがあり、紅白の布を巻いた四本柱も残つてゐる。その横の方には扉や板戸で圍つた舞臺が出来てゐて、支那家屋の壁の裝飾などでそれをうまく飾つてある。出發前見たニュース映畫の中に、戦地のお正月を迎へる兵隊さんの色々の場面があつたが、向ふハチ巻で土俵や舞臺を作つてゐる兵隊さんの姿が判つきり眼に見えるやうに思つた。滞在中その土俵が再び使はれる機會がなかつたのは、大いに期待してゐるだけに



賈花の傍路

甚だ残念であつた。

兵隊さんの中に圍まれて暮してゐた一ヶ月、私は起床ラッパと共に床を離れた。兵隊さんの點呼と體操が終る頃、そろ／＼空が明るくなり、その白みかけた空を背景に練習飛行の編隊が頭上をかすめて通るのは、如何にも勇壯な戦地の朝を感じさせられた。

毎朝の眺めは、も一つ避難民への給米風景であつた。軍隊と治安維持會の手で市中の隨所で米の廉賣をやつてゐるが、この兵站部でも給與を施してゐた。衛兵所の前で米を渡すのであるが、避難民は皆うちから長蛇の列を作つて待つてゐる。思ひ思ひの服裝をした老幼男女、凡ゆる種類の支那人をそこに見ることが出来た。スケッチ帖を片手に、私は毎朝この一群から本當の支那の體裁を嗅ぎ當てようとしてゐた。

大陸の朝の雲は、實に鮮かな色彩の亂舞であるが、滞在中日も雨に會はなかつた私は、思ふ存分その美しさを味ぶことが出来た。朝の美しい空は夜もまた美しいことは何處でも定つてゐるが、廣東の大きな家には大抵屋上に夕涼みの亭が出来てゐるので、空への鑑賞には持つて来いである。私の宿舎の屋根には亭はなかつたが、ヴェランダに使へるやうな一寸した設備があつた。降るやうに明るく燦いてゐる星を眺めに、私は何度となく屋

上まで藤椅子を持つて行つた。

*

花の多い廣東では、戦地の食卓に似合はず贅澤に花が飾られてゐた。兵舎の窓や家の傍などにも鉢が飾られたり花が植ゑられたりしてゐた。その花は多く菊や金盞花やダリヤなどで、日本で云へば秋の花であるのも、私には興味があつた。

食事は將校達と一緒に食堂でとつてゐるが、膳部などは皆内地から取り寄せたものばかりで、之も戦地の氣分ではなかつた。給仕の女の子は日本人と支那人が夫々五六人づつゐるのも意外であつた。日本人の方は大分のデパートに働いてゐたのを連れて来たさうだが、何れも旗の渡に取り圍まれてやつて来たのだといふ。支那人の方は家族にはぐれたり兩親を失つたりした氣の毒な者ばかりであつたが仲々元氣に働いてゐた。微榮ましい日支女性の親善風景を、毎日の食卓の傍に見得たことは、圖らざる愉快な思ひ出であつた。

支那人の給仕の中にはかなり良い家の娘さんもあるといふことだつたが、出發の前日、明日は愈々飛行機で歸るからと話したら、一人の娘さんが早速筆をとつて「乗機平安祝貴君」と書いてくれた。私は東京までその紙片を大切に持つて歸つた。

廣東雜記

北支從軍の場合もさうであつたが、今度廣東へ行つて、先づ最初に驚かされたのは、その復興振りの豫想外なことであつた。戦争と復興と建設が同時に行はれることに、今度の事變の特質があることは今更云ふまでもないが、その道程をまさくと自分の眼に見て來て、私はどれ程力強い頼もしさを感じたか知れなかつた。

占領當時はホンの數へる程しか居なかつた避難民は、日夜復歸の數を増して、私の歸る頃は五十萬人にも上つてゐた。閉ざされた店が開かれるのは目に見えて増え、例の泥棒市までがいち早く復興して麗々しく掠奪品を飾つてゐる。東京を發つ前は、いくら廣東料理の本場だとは云へ、料理屋で御馳走を喰べられやうなどは夢にも思はなかつたが、珠江

バンドの「金龍」といふ料理屋は支那美人を十人も揃えて既に立派に商賣をやつてゐるのである。十六階建の豪華ホテルも相當な繁昌を見せてゐるし、バンドの大旅館、大商店は日増しに店をあげ出して、そこらだけを見てゐれば、迎も戰場とは思へない程の賑かさである。

日夜繰返された我が荒鷲の爆撃は、軍軍施設以外のものに對しては一指も觸れない正確さを示すと同時に、目的物に對しては實に徹底的な峻烈さを示してゐる。有名な廣州驛の廢墟こそは、その猛爆の最も代表的な見本であるが、これなども私の歸る頃にはキッチンと跡片付けが出来て、大きな機關車がプラットフォームに横付けになつてゐた。戦車や装甲自動車や無数の銃砲を満載した貨車數十輛を一度に木葉微塵にした猛爆であつただけに、私が着いて直ぐ見た時は、その破壊の姿は猛烈を極めてゐたが、斯うして汽車が走り出すやうになつて見れば、嘗ての慘狀も全く夢のやうにしか考へられない。

町中を埋めてゐた抗日ビラも、今はすっかり塗りつぶされ刺ぎとられて、そのあとには親日ビラが町全體を新しく彩つてゐる。「親日防共」とか「新廣東建設」と云つたやうな新しい文字が、町の新たな雰圍氣の中に活々と浮んで居り、そこに「落後將政權」の刺がされた

跡との対照が誰の眼にも一目瞭然である。

復歸避難民は今のところ未だ窮民が大部分を占めてゐるが、これに對して宣撫班と治安維持會の手で毎日米の廉賣をやつてゐた。老幼男女無數の支那人が種々様々な格好で、蜿蜒長蛇の列を作つてゐる姿は、悲慘と云ふよりはむしろ悠々たる大陸氣分で、そこに支那人の生活感情が惻々と纏はれるやうな氣がした。私がスケッチ帖を出してゐると、描かれた當人は大いに得意氣な様子であつたり、その他の連中も格別現在の境遇に屈託してゐる風が見えない。現實の中に自分を生かすことを支那人程よく心得てゐる者はないが、さうした氣分がまざくと感じられる。その根強い生活力が、日本の新しい指導力の下に、やがて本來の姿を見せる日も遠いことではないに相違ない。

建設面の一部門を擔當する對外宣傳の機關も私の滞在中既に活動を始めてゐた。漢字の廣東旬報、英文の香港日報がそれであるが、斯うしたものまでが戦争の一部分として等閑視され得ない理由は、流石に現地の空氣の中で卒然と理解された。力めて戦争の建設面に觸れたいと考へてゐた私の希望は、斯うした色々のもので、豫期以上の満足を與へられたのであつた。

飛行機が着陸するまでは、廣東の暑さはかなり激しいのではないかと想像してゐたが、恰度内地の五月頃の氣候で、滞在中絶好の避暑をすることが出来た。何でも私の行つた頃が、廣東の一番いい時季だといふ話であつた。

緯度で見ると臺灣の方がずっと北に寄つてゐるが、臺南で正月を過ぎた私の経験からすると、臺灣の方が遙かに暑くもあり、凡てが熱帯的であるやうに思はれる。臺灣が暑いのは暖流の関係もあるのであらうが、大陸の地続きである廣東は、やはり大陸的な氣候によつて支配されてゐるからであらう。

廣東一帶の風物は、さうした氣候を反映して、温帯と亞熱帯との混合された氣分を現はしてゐる。樹木なども榕樹や荔枝やバナナのやうな亞熱帯な植物の外に、梅や桃のやうな温帯性の樹木も少くない。それに私の行つたのは夏と冬の間の、内地で云へば春の時期に當つてゐる時であるから、梅の花が咲いてゐるかと思へば、冬に遅れた紅葉や黄葉も見えるといふ具合で、春秋一度に到る不思議な昧めを味つたのであつた。

從軍の目的の一つであつた陸軍省へ保存する記念畫の題材は、安藤軍司令官と御相談し

て廣東市の大觀を描くことに定めたが、全市を一覽する場所を觀音山の上の中山記念塔に選んで、私は毎日こゝへ通つてゐた。觀音山の全體の感じは落葉散り敷いて、むしろ秋を想はせるものがあつた。

こゝから眺めた廣東の全貌は、支那と云ふよりはアメリカ邊りの市街の感じであつた。革命の發祥地に兼ねて歐米依存派の根城であつた過去をそのままに現はして、支那建築などは殆んど數へる位しか目に入らず、大部分は四角いビルディングばかりである。革命前までは城壁もあつたのであるが、これらはすつかり取り壊されて、その跡は廣い道路になつてゐる。西洋風の公園は數ヶ所にあり、街路樹もよく茂つてゐて、上から見下した眺めは可成り生きくとした近代都市といふ感じであつた。

無法な支那軍の焦土戰術と、どさくさ紛れの敗殘兵の放火とで、町の各方面には燒野原になつてゐる場所も相當にあるが、この山から眺めた分にはそんなところは何かに隠されて目に入らない。私はスケッチの筆を走らせながら、屢々こゝが戰場であることを忘れ去つてゐた。

市街を離れて郊外へ行くと、こゝもやはり西洋風な感じである。ユーカリの樹があつた

り洋風の小住宅が並ぶるたり、私はそこにスペインの郊外へでも行つたやうな氣分を味つたのである。

*

廣東といふ主屋だけを見て、珠江といふ庭を見ないことには話にならないが、珠江の洋々たる趣きは、全く黃河にも揚子江にも見られないものがあると思つた。

私は海軍の〇〇艇で黃浦まで河を下つたが、その間の如何にも漂渺とした大陸的な風光には非常に興味を感じた。餘りに廣くて靜かで、それは明るい癖に何か無常感を想はせるやうな寂しさを持つ景色であつた。文字通り水が岸を洗つてゐる先に、時たまボンと古風な九重塔が取り遣されたやうに見えるのなども、一層さうした感じを深めるものがあつた。

黃浦は有名な軍官學校が南京に移されたあと海軍學校の所在地として知られてゐる。革命戰の烈士を祀つた墓が小高い山の上にあるが、この邊には松が多く、一寸湘南へも行つたやうな氣分があつた。この山から眺めると、珠江の流れがら字型に低い土地を幾重にも縫つて行くのが見える。そしてその所々に支那軍が閉塞に用ひた汽船のマストや煙突が

小さく目に入るのは、やはりこゝが新戦場の跡であることを語つてゐる。

私が黄浦へ着いた日は恰度支那人の子供に日本語を教へる小學校が開かれる日なので、私等の一行も招かれて開校式に列席した。もうすっかり覚えこんでゐる上手な君々代と愛國行進曲の合唱を聞き、最後に支那夫人と椅子を並べて記念撮影をしたが、今度の旅行の中でもこれは仲々うれしい思ひ出であつた。

— 昭和一四・四、みづゑ —

廣東四景

月夜の廣東

地圖で見ると遙か臺灣の南方にある廣東が、内地の人から恰で炎熱の都市のやうに考へられ易いのも當り前のことかも知れないが、實際の廣東は必ずしも凡てが熱帶的だといふわけではない。大陸の地續である爲に、全體の氣持はむ

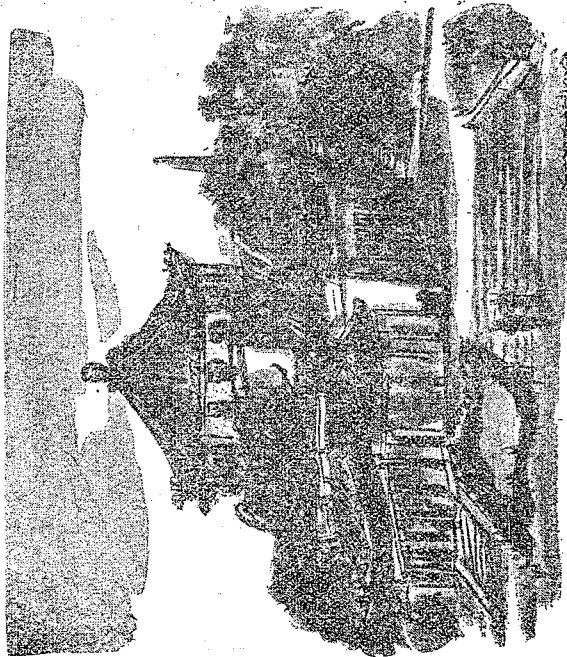


しる温帯に近く、それに熱帯的なものを加へたといふ感じである。

その温熱兩帯にまたがつてゐる廣東人の生活氣分を如實に窺ふことが出来るのは、廣東市街を俯瞰してこの市特有のスカイラインを見出した時である。四角い西洋建築が大部分を占めてゐる廣東のスカイラインを、單調と平凡とから救つてゐるものが、そこに見出されるのである。住宅街の屋根の上には種々様々の形をした亭がつくられて居り、ホテルやビルディングの上にはまた大小色々の涼み臺が出来てゐる。

その亭は支那風のものもあれば西洋風のものもあり、更には二階建の塔のやうになつてゐるものもあつて、そこに南國の爽快な朝夕を味ひ楽しんでゐる市民の日常生活の氣持が如實に傳はれるのである。

南國の多彩な雲は、朝も夕も素晴らしく美しいが、澄んだ空の月夜の明るさがまたこよなく魅惑的である。その月明の下で變化に富んだ屋上のスカイラインを眺められるのは確かに廣東獨得の美觀であると思はれた。そしてそれらの亭の上には煙管をくわへた大人の長暢な姿が見え、ルーフ・ガーデンの電飾の下では旅客の涼しい食事姿が見られるやうになるのも、やがて遠いことではあるまいと、さうした場面さへ自から愉しく想像されて來



るのであつた。

中山記念堂

廣東市の西北隅觀音山の南側の麓に、孫文を記念する中山記念堂がある。市街の大建築の殆んどが如何にも歐米依存の空氣を濃厚に反映した四角い西洋建築である中に、この建物と市政府の建築だけは純支那風を基調として、大いに國粹振りを發揮してゐる。

市政府の建物は上海のそれより稍一廻り小さいが、それでも東京へ持つて來ても有數な程の堂々た

る大建築である。中山記念堂の方も、これに劣らぬ壯大なもので、支那式のあくどい色彩が見た眼には一通り金碧燦然たる姿であるのは、何も知らぬ支那大衆に國民政府の外装だけの威容は誇示し得たのであらうと想像される。

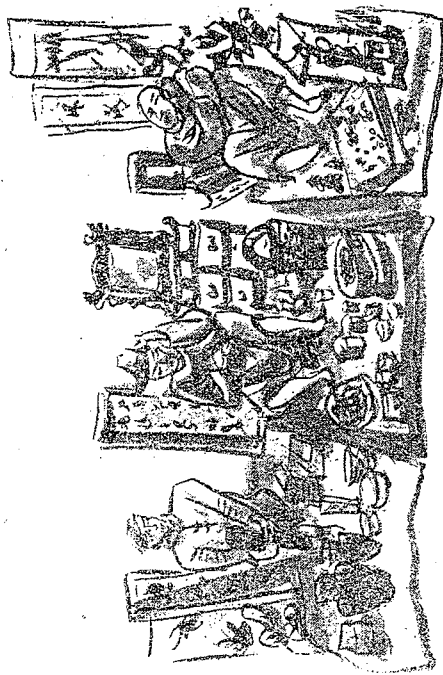
私がこの建築を見て、非常に強い感銘を受けたのは、然しそんなことではない。私はこの附近一帯皇軍の徹底的な懲罰爆撃の廢墟が見られる中に、これらの建物には何らの損傷もないことを知つたからである。數百回に上つた連続爆撃は、その間絶対に軍事施設以外のものを回避してゐるのであるが、その偉大な事實は中山記念堂によつて正に身を以て證明されて居るに外ならない。

泥 棒 市

目覚ましい廣東の復興は、日に増す避難民の復歸と共に、いち早く名物の泥棒市を復活させた。何程開店に手数がかゝらぬとは云へ、泥棒市が復興の先驅を承はるなどは、如何にも支那式である。

路傍に並べられた「商品」の中には高價な家具や書畫骨董の類が夥しいが、それらの悉くは、皇軍占領當時のトサクサまぎれの掠奪品なのだから驚く。皇軍は占領當座市中の混亂を防ぐ爲に郊外へ駐屯してゐたが、それを却つていふことにして敗殘兵と暴民の群が凡ゆる掠奪をやつたのである。皇軍がそれを知つて市中へ入つた頃は、既に市中の凡ゆる建物は空っぽにされてゐたといふ始末である。

驚くと云へば、最初の頃その素



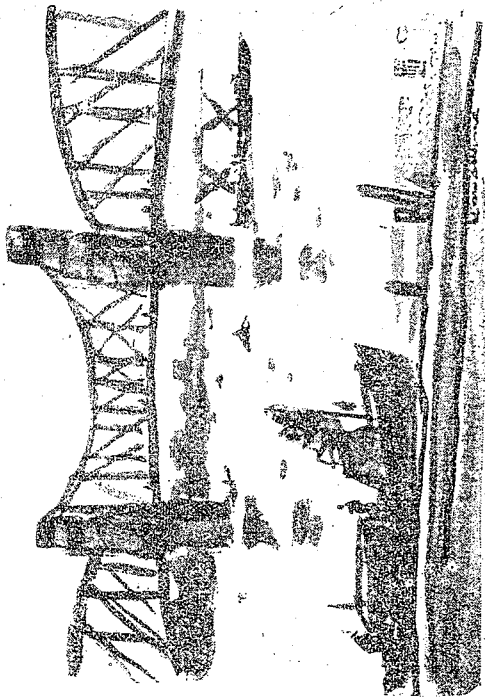
晴らしい「商品」を掘出しに、沙面租界から盛んに西洋人が買出しに来たさうだ。中には多勢人を使つて、大量仕入れの指揮をとつてゐた西洋人の姿も見られたといふが、斯うなると吾々日本人の神経からは、驚くよりはむしろ呆れると云つた方がよささうである。

166

珠江風景

珠江の眺めは廣東の庭である。この庭がまた、廣東ならではの色々な情景を、吾々の前に展開してくれる。

數千にも上つたといふ珠江名物の蛋民の船も、西洋人がフラワー・ボートと呼んでゐる遊女の花艇も、皇軍の占領と同時に支流の方へ追ひやられて了つてゐるが、そのうちの幾つかは軍で使役してゐるので見る事が出来た。船上を家としてゐるだけに家としての設備は小さいながら凡て整つて居り、而かも上等の部屋に當る部分は柱に青貝で花や鳥の模様などが飾られてゐたり、ペンキで色々なものが描かれてゐたりして、そこに彼等の生活を微笑ましい氣分で窺ふことが出来た。船を操るのは主として女や子供であるが、私のス



ケツチを覗きに来るそれらの女の子の船頭さんは、何れも無邪氣で可愛かつた。

ここに描いたのは市街をつなぐ珠江唯一の橋——海珠橋である。皇軍の水運を邪魔する爲に支那の飛行機がここに爆弾を下したのださうだが、支那機にはお手柄なことに開閉橋の機關部にうまく命中したといふことだ。それで未だ開閉は出来ないが軍隊もトラックも吾々もその上を通ることには一向に差支へはないのである。

— 昭和十四・三、大衆文藝 —

167

珠江の秋景

私の廣東従軍行は今年の正月であるから、内地で云へば眞冬の話になるが、南支の水は未だ暖く、恰度春か秋の時候であつた。陽氣ばかりでなく、自然の姿がまた春秋を一緒にしたやうな眺めであつたが、大體云へば私には秋の氣分がより多く感じられたから、ここでは大陸の秋景色として南支の風物を思ひ出してみよう。

北支が黃河によつて代表されるやうに南支を語つて珠江を云ひ落すことは出来ないが、私はこの珠江を廣東から贛浦まで下ることが出来た。珠江の流は元來急流なのださうだが見たところは、如何にもトロリとした感じで、それがまた私には如何にも南支の氣分によさしいやうに感じられた。

河の左右兩岸には堤防が出来てゐるがそれは河面と殆んどスレ／＼位の低いもので、溝々と漕へられたその水量に呑まれて了ひさうにさへ見えた。そしてその堤防の先には無限に平坦な土地の展りが續いて、天も地も濃々的になり切つてゐるのである。天地悠久の感と云はうか、これだけは日本では到底見られない眺めであつた。

その平坦な土地には所々に樹木の姿が見えたが、それが面白いことに、バナナや榕樹のやうな亞熱帯の木の中に、白い花をつけた梅の木やその他温帯の木が見えるのである。梅が咲いてゐるのは春であるが、亞熱帯系の大陸の木々は或は紅く或は黄に紅葉してゐるところすつかり内地の秋景色である。つまりは空間的には温帯と亞熱帯を一緒にし、時間的には春と秋とをつき交ぜた景色がそこに展開されてゐるのである。

— 昭和十四・一〇、日本藝術新聞 —

廣東のいかもの食ひ

支那人の不思議な國民性の現はれの一つに、彼等のいかもの食ひがある。日本人の中にも随分變つたものを食べる人があるが、支那人の方はそのいかものを特にいかものとして食べてゐるのではない。吾々から見ればいかものなのであるが、彼等にとっては、それが大して變つた食物のやうに考へられてゐないのは、日本人の場合とは非常に違つてゐる。日本人のは個人の偏奇的趣味性の現はれとしてのいかもの食ひであるが、支那人のそれはむしろ必要によつて普通化された習慣的事實であるかのやうに考へられる。

支那人のいかもの食ひの始まりは、恐らく漢法醫藥に糸を引いてゐるのではないかと思ふ。大陸の風土病に對する解毒劑、若くは強壯藥として試みられたものが、やがて料理道

に於ける彼等の徹底性と結び付いて、それが次第に食物として工夫されるに至つたものであらう。その點、彼等のいかもの食ひそのものゝ中に、支那人の凡ゆる特性の凝集が窺はれるやうな氣がする。

今度私が行つた廣東は、昔からいかもの食ひの本場として知られてゐるだけに、随分奇妙な食物を色々見ることが出來た。先づ第一に有名なのは蛇料理であるが、急テンボの復興につれて、泥棒市と蛇料理がいち早く店開きをしてゐるのは、流石に廣東らしいことだと思つた。市場などへ行つても、豚や鶏と一緒に平氣で蛇がブラ下つてゐるし、生きた蛇がウジャ／＼入つてゐる網の箱が店先に無雜作に置かれてゐる。蛇通はその網から覗いて見て、うまさうなのを選つて買ふのださうだが、吾々なら先づ一寸見ただけで、食慾などは何處かへぶつ飛んで了ふところである。

蛇料理屋に行つても、賣物の見本がちゃんと備へてあつて、お客がこれはうまさうだと云ふと、早速その蛇を持つて行つて料理して來るのだといふ。それに毒蛇程精分が強く味がいと云はれてゐるから、見た眼にも凡そ物凄いのが澤山出るらしい。毒蛇と云つても毒牙さへ抜いて了へば何でもないと云ふのは理窟で、毒蛇の首をチヨン切るところなどは



路傍の市

餘り氣持のいゝ眺めではなささうである。

猫も仲々賞美されてゐるが、これは黒猫が一番美味さうである。猫を食べる位だから鼠を食べることは勿論で、骨と皮をすつかり取り去つて乾物にしたのがブラ下つてゐるのを何處となく見かけた。鼠の中にも、家鼠、畑鼠、溝鼠と色々の種類があるわけだが、不思議なことに、その中で溝鼠の味が一番上等だといふ話である。恐らく溝鼠が一番偏食をしないからであらうと思はれる。

鼠の料理の中で一番凝つたのは、蜜漬けにした鼠を生きたまゝムシヤクやる食べ方である。この料理は凡そ考へたもので、先づ産れたばかりの小鼠をいきなり蜜の中に入れて

て了。鼠は蜜よりほかに食べ物がないので、蜜ばかり甜めてゐるうちに、やがて身體全體がすつかり柔くなり、透き通つたやうになつて来る。それを尻尾をぶら下げてアングリやるのださうだが、口の中では未だ鼠がチユツク云つてゐるといふから驚く。誰が考へ出したのかわからないが、始めてこの料理を思ひつた男は確に斯道の大天才だつたに違ひない。

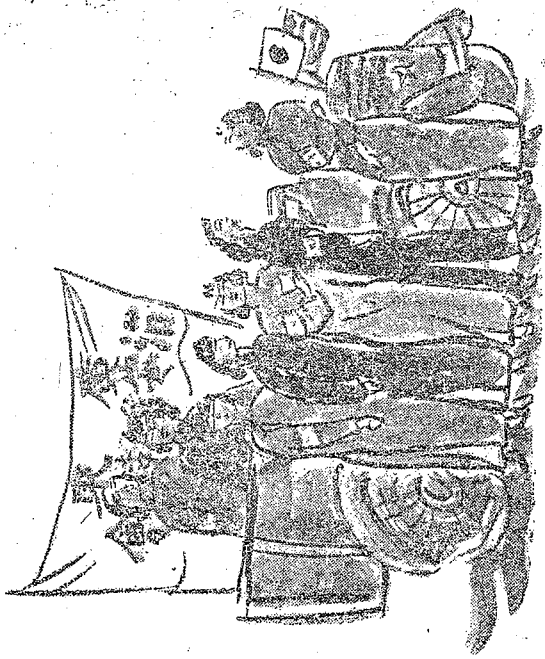
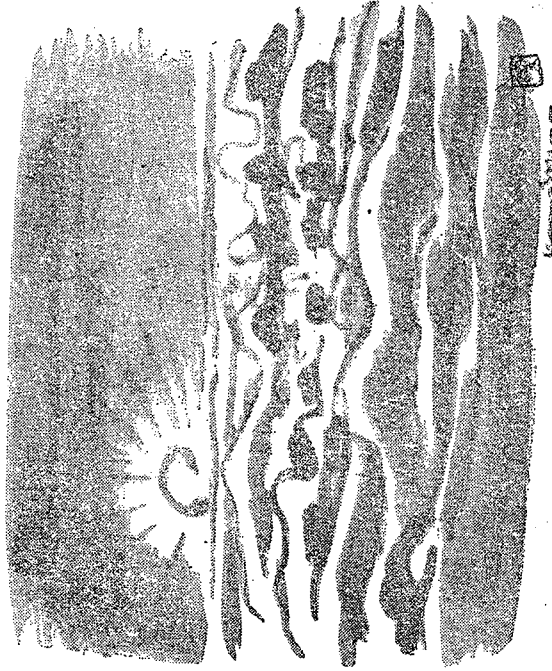
廣東人が米虫を食べることは本で讀んでゐるが、私が見たのは油蟲のやうなやつである。何でも水の中にあるといふ話だから、舟蟲の種類かとも思ふが、黒光りするやつが籠の中にウヨクしてゐた。銅片一つ出してそれを三つ四つ貫ひ、足だけもぎとつて、羽根のついたまゝペロリとやつてゐるのである。本當にうまいか不味いかは知らないが、見たところは如何にも美味さうである。この徹底し切つた廢物利用食餌法には、流石に顔負けさせられて了つたのだつた。

— 昭和四・六 花椿 —

雲海の旭日

廣東から福岡までの歸りの空路の中で、最も楽しみにしてゐたのは、機上から日の出を見ることであつた。臺北飛行場を未明に出発する旅客機は曇つてさへなければ、琉球列島の上で必ず日の出に出會ふといふことを聞いてゐたが、折よく晴天であつた上に、氣流を避けて機は雲上にあつたから、まさに絶妙の雲海旭日に接することが出来た。銀色に光つてゐる雲の浪を分けて、眞紅の太陽が上つて来ると雲の浪は陽向を桃色、蔭をコバルト色に染めて、その縹緲たる氣分は何とも云へなかつた。

— 文藝春秋現地報告 —



女性宣撫班

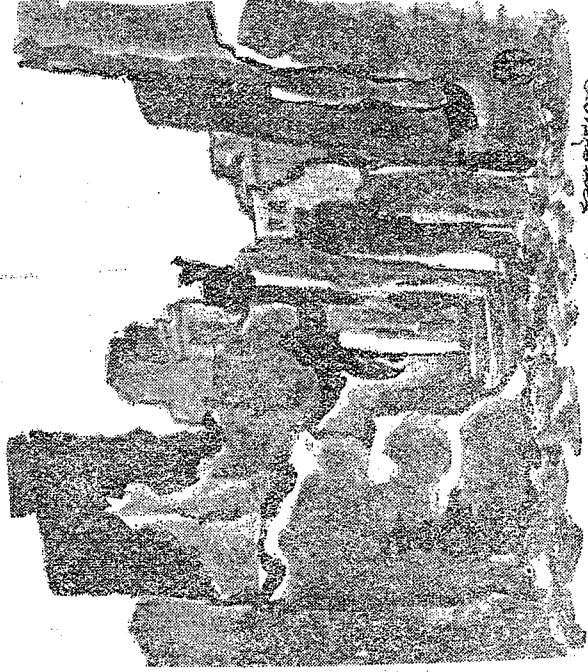
「舊都」北京の女性が概して淑やかな印象を與へるのに對し、「近代都市」廣東の娘さん達は流石に活潑である。皇軍の占領後、間もなく廣東婦人大会が開かれ、更に多数の姑娘が宣撫班の手傳ひを志願したのなどは、それだけこゝにインテリ女性が多くゐるといふ證據である。新しい女上のタイプをいゝ意味に發揮したこれらの姑娘達が、夫々宣撫班の腕草をつけて、街頭演説に出かけて行くところは、仲々頼もしい姿であつた。

— 文藝春秋現地報告 —

廢墟素描

支那軍の集土戦術の犠牲となつた数々の廢墟のうち海珠橋畔の一角が最も痛めつけられた姿であつたが、私はこの廢墟の種々相を眺めながら、そこに一種人間の想像も及ばぬ不思議な形と線のあることを知つた。そしてその怪奇な形を見詰めてゐるうちに、それが妙義山の奇景なほど一脈相通するものであることに気がついた。地上の如何なる姿も自然の條理を外した形ではあり得ないが、その點、廢墟もまた山崩や斷崖の形と全く同じ氣持なのであつた。

— 文藝春秋現理報告 —



176

新思想の入口・廣東

一月六日に出發、二月七日に歸京しました。往復とも飛行機でしたから、正味一ヶ月廣東にゐたわけですが。司令官の安藤中將がいろいろ親切に案内して下さつたので、市街は詳しく觀ることが出来ました。少し郊外へ出ると危険だからと許されず、南支の農村は見られません。珠江岸の大廈高樓は國民軍のために焼き拂はれ、また粵漢線の終點たる廣州驛は占領前のわが軍の猛爆を如實に物語つてをり、慘澹たる「戦禍」は掩ふべくもありません。街の北側に觀音山といふ丘があり、その山頂に孫文を記念した中山記念塔があります。私は軍の囑託で事變記念のために「廣東市大觀」と題する六十號の大作をものすべくこの塔に登つて市街を俯瞰しました。驚いたことにはあれほど慘澹たる空爆

177

や焼拂ひの跡が殆んどわからぬ位なのです。それほど廣東といふ街は大きな近代都市です。

廣東は新思想の入口で、革命が度々あり、そのため今日では、ほとんど「支那的なもの」は認められず、古美術類も無く、その意味で大いに失望しました、觀音山の中腹に博物館がありますが、貴重な品は國民軍が逃げる時持ち去つてをり。あとには古代瓦のコレクションが若干残つてゐるだけでした。「水上病院」や「寺院船」さては有名な花艇（フラワ・ボート）等で、いかにも南支らしい特異性を漂はせてゐた蛋民も、治安維持の立場から追ひ拂はれ、私が行つた頃には僅に二、三十艘が残つてゐるばかりでした。蛋民の男は多く陸上へ出稼ぎしてをり水上は女の天下です、蛋民の先祖は恐らく、中原の戦ひに敗れた日本で言へば「平家の落武者部落」といつたやうなものだらうとのこととです。

昨年夏には北支方面を視て來たし、今春は南支へ行きましたので、いよくこの夏には漢口を中心に中支一帯を視て來ようと思ひます。それで大體新興支那の全貌を知ることが出来るわけですが、支那の前途はまだ相當荆棘の途でせう。廣東は、私が行つた頃、早くも避難民が續々歸つて來てゐたし、物資も豊富、市場は賑がでしたが、支那全體としてみれば、このやうな歴史的「戦禍」から立上ることはなかなか大變でせう。

「戦禍」といへば、私は丁度世界大戦のときに、パリに留學してゐました。戦争勃發後間もなく、大使館では居留民に立退きを勸告しましたが「美術の都パリ」を熱愛してゐた私は、藤田嗣治君と二人で、パリに踏みとどまりました。停車場に殺到する避難民をスクETCHしてゐるとき、すぐ側に爆弾が落ちたのには、驚きました。國をあげての動亂なので、好きな繪筆ばかり握つてゐるわけにもゆかず、萬國聯盟赤十字社へ入つて繃帯かけや、擔架かつぎの練習をしました。しかしさすがに「美術の國」だけあつてどんなに食糧が缺乏したときでも美術家保護協會へ行けば野菜のごつた煮を食べさせてくれました。もつと長く居たかつたのですが、故國の老父母が矢鱈に心配するので一九一五年アメリカへ渡り、一九一八年に歸朝しました。

一八七〇年の普佛戦争のときプロシヤ軍に包圍されて籠城し、食糧に困つて鼠まで喰べた苦い經驗を有するパリ市民は大戦の當初から戦争に怯えてゐました。この點敗戦の經驗がなく「戦へば必ず勝つ」といふ自信を持つてゐる日本國民と好對照でせう。たしかにこの自信があるからこそ、日本軍は強いのでせうが、他面直接「戦禍」に曝されてゐないために、いつしか心が弛むといふことがないでせうか——。——昭和二四・一〇、日本電報——

廣東から歸つて

歐洲航路の寄港地である上海と香港は、これまでも數度に互つて瞥見だけはしてゐるが、香港とは目と鼻の先にありながら、今まで廣東は瞥見する機會もなかつた。事變が始まらず、南支作戰が展開されなかつたなら、恐らく私にとつて、廣東といふ土地は永久に未知の土地として終つたに相違ないが、このことは同時に日本人の大部分に對しても云ひ得ることであらうと思ふ。南支那海の彼方、波濤幾千里を隔てるこの都市が、今日斯くも吾等の身近かに感じられるといふのは、吾等同胞がそこに征戰を進めてゐるからであり、それはやがて日本と支那との距離が如何に近接されてゐるかを、まさくと實感せしむることであるに外ならない。「支那」も「大陸」も、既に吾等にとつて何等別種のものでなくなつ

てゐるが、これこそは實に、眼前の事變が齎らした最も偉大な無形の成果であらうと思はれる。

今度の廣東行を、一路飛行機によつた私は、時間的にも日本と廣東との距離を著しく短縮して味ふことが出来た。最初の豫定では東京からの全行程を機上の旅で行く筈であつたが、都合で福岡から飛行機に乗ることになつた。福岡から一氣に那覇に飛び、那覇から臺北へ、そして最後のコースを臺北から廣東まで一氣に南支那海を翺破したのだつた。

臺北飛行場を發つ時は、凡ての準備に慎重を極めてゐた。それは日本の領海を離れるといふ意味からばかりでなく、目的地の四周には未だ殘敵が蠢動してゐて、萬一の場合も絶対に不時着が出来ない爲であつた。機上の體驗は既に萬腔の信頼をこの新しい交通機關に寄せしめてゐたとは云へ、流石に敵地へ飛込むといふ一種の緊張感は、自ら自分の身を引き締めるものがあつた。滯空〇時間の後、脚下に横はる海岸線の中に、無血敵前上陸の勇名を轟かせたバイアス彎を俯瞰した時、私は愈よ戰場の上に来たといふ感激が、例々と身内に湧き上るのを押へ得なかつたのだ。

往路の緊張に對して、歸途の機上はいくらか暢んびりした氣分であつた。特に臺北から

那覇へ向ふ途中、圖らずも雲上の日の出を見ることが出来たのは、今度の飛行機旅行中最も印象に残つた思ひ出であつた。

182

未だ邊りが薄暗いうちに臺北飛行場を出發したダグラス機は、氣流を避けて高度を高めやがて雲海の中に入つて了つたが、東の方がホノ明るくなるにつれて、雲海の浪が一面の透明な銀色に變つて、その中から眞紅の太陽が上つて來るのだつた。それにつれて雲の浪は陽向の方を薄桃色に、陰の方をコバルト色に染めて、その明暗の融け合つた織模様は何とも云へぬ縹緲たる美しさを見せてゐた。私は暫く、地上では想像も及ばない雲上の壯觀に、たゞ見惚れてゐるばかりであつた。

雲の浪が次第に途切れて來たかと思ふと、その裂れ目から今度は紺青の海が光つて見えて來る。久米島を越して暫くするうちに那覇へ着くが、この邊り琉球の海の美しさには驚かされる。飛行場に着陸する間、那覇の市街を俯瞰した景色も、如何にも南國らしく明るい色彩に染ち満ちて、豫想外の美しさだつた。早速スケッチ帖を掲げたくなつたが、時間がないのでどうにもならなかつた。いつか一度はゆつくり寫生に來たいと考へながら、私は再び機上の人となつた。

那覇から先はづつと洋上飛行を續けるが、やがて陸地が霞んで見えるのは懐しい内地の山河の姿である。間もなく雲仙が脚下に横はり、有明海が湖水のやうに靜かに光つてゐる。雲仙嶽も空から見ると恰も大きい感じがしないし、なだらかな山脊、靜かな海、それは如何にも優しい美しさを持つた眺めである。大陸の山、南國の海と、一度に見て來て、今度は内地の風景を見ると、泌々日本の景色が箱庭のやうな美しさであることを感じる。如何にも優美ではあるが、同時にそれは小さく纏り過ぎて如何にもせまごましい。大陸的と島國的との問題が、空からの眺望によつて一層具體的に指示されてゐることを、私は渺からぬ興味を以て眺めてゐたのである。

*

餘りにも近代化された廣東の市街から、「支那」も「大陸」も殆ど感じ得られないことに失望した私は、珠江の眺めによつて漸く自分の宿望を果し得たやうに思つた。

北支が黃河に、中支が揚子江によつて、夫々の性格を象徴せしめてゐるやうに、南支の氣分は珠江によつて如實に窺ふことが出来る。實際の流れはかなり急流だといふことであるが、見たところは如何にも南國らしくトロツとした感じである。その洑々たる流れは如

183

何にも南支といふ氣分で、そこに自ら北支とは別個の趣きがあつた。

大陸の渺茫とした雰圍氣をまざまざと實感したのは、珠江を黃浦まで下つた間の眺めであつた。水際と殆んどスレ／＼になつてゐる低い兩岸は、そのまゝ水平線まで無限に平坦の展がり續けてゐる。人家も殆んどなく、人影とでも見えない。たゞ所々に榕樹やバナナの木が目に入る間に梅や桃の姿が見えるのは、如何にも溫熱兩帶に跨がつてゐる土地らしい眺めであつた。

水平線に届けた眼をそのまゝ空に見上げた時、こゝでも空の無限に大きいことを沁々と感ぜざるを得なかつた。そこには天も地もたゞ止まるところのない擴がりを見せてゐて、寂寞の氣が茫々と立ち罩めてゐるのである。實に何とも云ひやうのない明るい寂しい廣さが見る眼遙かに連つてゐるのである。天地の悠久と無限の平和にそのまゝ通じてゐるかのやうなその氣分は、實に、支那七千年の歴史に流れてゐる民族の性格そのもの、感じてゐる。支那は大きいといふことを沁々感じさせられる眺めである。

この平坦な土地の展りの間に、小さい五六本の木が一と塊りになつてゐたり、古塔な丸重塔がボツンと取と遺されりゐたりするのを見ると、何となく栖風さんの南支情景畫が思

ひ出されて来る。さうした部分の情景には、如何にも日本畫家の筆に向きさうな景色が尠くない。そして事實、今までの日本畫の中に、さうした氣持を伸々良く描いてゐるものがあつたことを思ひ出すのである。然しその渺茫とした全體の氣分はどうであるかと云へば、それは必ずしも的確に捉えられてゐるとは思はれない。その困難こそは、即ち「大陸」を描くことの吾等共通の困難であるに外ならない。大陸の風土をあくまでも正確に把握したいと考へる私は、その困難の反面に、それを益々張合ひのある仕事だと考へてゐるのである。

— 昭和十四年三月、搭影 —

戦時下の支那風俗

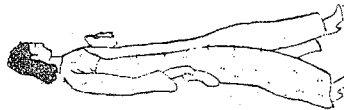
編輯の方が見えも支那の服装に就ての感想を書められたが、専門的にその方面を調べて来たわけではないから纏つたことなどは書けもしない。たゞ一個の畫家として自分の眼に映じたまゝを卒直に書いてみるよりほが仕方がない。

一體その國の服装が風土の所産であり民族性の反映であることに就ては今更改めて云ふまでもないが、同じ東洋人でありながら日本人と支那人とではその國民性が異なるやうに、服装にも大分の隔りがある。一と口に云へばこの場合も一方は大陸的で一方は島國的だと云つていゝやうである。

支那から歸つて船から上ると直ちに氣の付くことは、日本人の服装が千差萬別、一人と

して同じ柄、同じ色合ひの着物を着てるる者がないことである。つまりそれだけ複雑であり、同時に不統一だといふことを感ずる。女の服装に就て見れば先づ和服があり洋服があるが、和服の中でも純粹日本風なものもあれば西洋風を加味したモダンなものもあり、更に洋服の場合も色々流行があつて、それは恰で衣裳展覽會でもあるかの有様である。

これに比べると支那の女の服装は遙かに統一されてゐる。詰襟で裾までのワンピースに帯もバンドもなく、柄は何れも小さい模様であるから遠方から見れば無地の一色としか見



えない。その色も淺黄、薄緑、淡黄と大體が明るい中間色で各自はそれ程まらぐの色を使つては居らない。要するに非常に單純ですつきりしてゐることが、誰の眼にも支那服の特色として直ぐさま見られるのである。

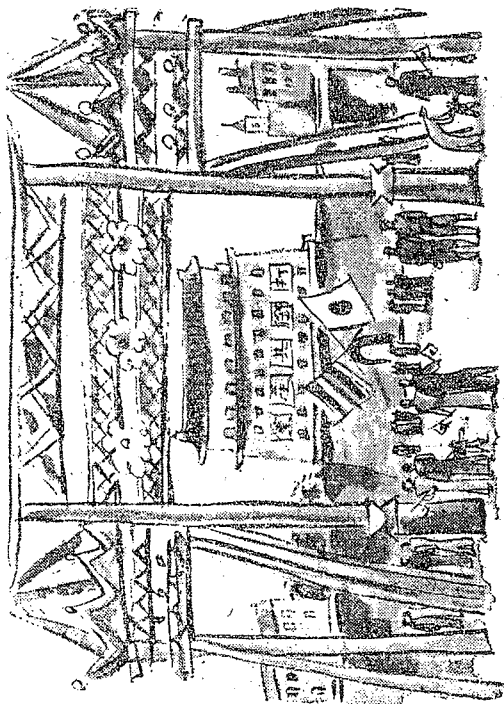
男の服装も一般に非常に單純である。その殆んどは無地の一色で、稀に紋織などを見ることがあるに過ぎない。支那服も清朝から引續き極く近年

まで贅奢を競つて緞子の着物などを平氣で着てゐたが、新生活運動が起つて以來一般に質實が尊ばれて、現在は大人なども儀式の時など以外は木綿服で通してゐる程で、とにかく日本から見ると一般的に頗る地味で簡單であるのは、むしろ意外に思はれる位である。

支那には大體中産階級といふものはないが、大人を除く一般の下層階級の者は驚く程質素である。夏ならば白の上衣にズボンであるが、冬は淺黄、鼠、茶などの綿入れに代るだけである。これは、永い間軍閥の争亂に虐げられた彼等の、たゞ銀さへ握つた居ればよいと考へる消極的な人生觀の現はれなのであらうと思はれる。

私は以前臺灣で支那服を見て繪に描いたことがあるが、今度北京で見た支那服は流石に上品で美しいと思つた。臺灣の支那服は南國風である爲に色も強いが、北京でのそれは如何にもしつとりと落付いてゐる。明るい色も決してケバくしくなく、濼い色の場合は更にまた上品である。その形も色も瀟洒で洗煉されてゐる點、やはり無言の裡に舊都の傳統を語つてゐるのであらう。

北海、南海の兩公園へ行くと、緑の木蔭に斯うした美しい衣裳が幾つとなく點綴されて、それは如何にも長閑で平和な眺めである。一寸日本では見られない大らかな感じであ



北 京 風 貌 照 像

るのも、風土と服装との大陸的調和とでも云ひ度い氣持である。日本なら奈良朝の昔と云つたやうな、單純で而かも洗煉されてゐる支那服の美しさはまた捨て難いものである。

*

人間の衣服をただ見た眼だけで觀察することは餘りに暢氣過ぎる話であるが、さうかと云つてこれを實用の型にはめ過ぎて國民性の美點までを無視するのも感心出來ない。日本の服装が今少しく統一されていくことは國家經濟上から

もまた風俗美學上からも差支へのないことであるが、問題はその微妙な限界線を何處に見るかといふことである。學生のやうな特殊なグループは制服を着けて却つてそれが調和して見えるが、社會人の誰にも揃ひのユニフォームを着せるといふことになると、それが民族の美點であるところの個人の趣味性をまで破壊する結果になりはせぬか、それが心配である。趣味性といふ言葉では説明が不充分であるが、日本人の細かい神経と微妙な感覺は世界に比類のない長所である。器物にまで神経を働かせて食物との調和を考へるといふやうなことは、唯物的に見れば明かに無駄な贅澤であるが、その微妙な感受性と心遣ひがやがて民族の工藝性、技術性の卓越を裏書きする事實として、幾多優秀な武器の製作と操作を成し遂げてゐることを忘るべきではない。斯うした美點を没却してたゞ機械的に凡てを劃一しようとすることは明かに民族の發展を期待する所以ではない。支那から歸つた眼で日本の服裝の複雑、不統一を反省せしめられつゝも、私がそれをたゞ一色に統制すべきではないと云ひ度い理由は即ちこゝにあるのである。

元來私が如何に日本人が贅澤な國民なのかそれを實感的に知つたのは、滿洲事變の直後熱河へ赴いた時である。彼等の衣服は木綿の首纏に限られ、食物は粟と稗にたまさか乾魚

が口に入ることがあるに過ぎない。住居はまた泥で作つた家とは名ばかりのものである。

これが私の始めて接した大陸の住民の生活だつたのである。何といふ日本人との相違であらうと考へた。そして日本に生れたことが沁々と有難く思はれた。衣食住の凡てに亘つて事實日本人程多趣味で複雑なものを示してゐる國民は皆無であるが、この金で買へない贅澤を思ふさま爲し得る日本人程幸福な國民が世界の何處にあらうと考へられた。

然し私はその時粟と稗を食べてゐる大陸の住民がそれを如何にも噛みしめ味つてゐるのを見て、日本人の吾々が恵まれた山の幸海の幸をどんな食べ方をしてゐるか、それを甚だ心許ない氣持で反省せざるを得なかつた御馳走も鵝呑みにしたのでは何の値打もない。假令粟や稗でも噛みしめ味つてこそ、山海の珍味以上の營養となるのである。その點蕪まれ過ぎた日本人が、贅澤に馴れて却つて本質的なものを見失つてゐはせぬかと、私はひそかに熱河の土民から教へられたやうな氣がしたのである。

服裝に於ても亦然りである。日本人の服裝の自由と複雑は、それ自身甚だ恵まれた條件の現はれではあるが、同時にそれが故に却つて支那人の服裝の統一と簡明とも學ぶべき多くのものを感じるのである。